

作中の「運動」は学生運動。作者名が坂口弘だからこそ重く心にひびく一首。四十余年昔のこと、当時の学生運動が、今から思うとイデオロギーにがんじがらめにされていたという感慨である。シールズ等、現在の学生の社会運動の身軽さが思い浮かぶ。

自分より若くて死んでしまふとはいけないことと叱りたかつた
大月閑

二十歳で死去した生徒を若い教師の立場で追悼した作。もつてまわつたような口ぶりが、直接的には言えない若い死への悔しさ、悲しみを伝える。

島と名のつく村であり大水の記憶くきやか歪む堤防
太田裕万

海が遠い土地なのに、地名に「島」がつく不思議をうたう。この歌のすぐ前に「槇島の下村しもなればご先祖は石垣つんで家を建てたり」という作がある。京都府宇治市槇島。内陸部なのに「槇島」という名の村だったのだ。宇治川に近い。宇治川が氾濫すると一面が水没し、一部が島のようになったのだろう。入り組んだ事情を、シブルに表現した工夫に注目。

ありし日の夫も緑内障を病み刀の鏢をみがきており
中島由美子

目を病む友をうたう一連中の作だが、目を病んでおられた亡き夫のイメージが印象的。刀の鏢をみがく、この具体性がみごとで、読者はその映像を鮮明に心に描くことができる。

川沿いの清掃終わり早淵川になり替わり礼言う小柄な老人
堀亜紀

作者も何人かといっしょに、川の清掃作業に参加したのだろう。「小柄な老人」も清掃していたのだと思う。ふつうなら挨拶は「おつかれさま」ぐらいなのに……、という思いが読める。「小柄な」が一首にリアリティをもたらしているようだ。

人よりも生命の長き木々を植え愛でいる吾を槇がみ
おろす
前川多美江

鎌倉の鶴岡八幡宮の境内に何百年もの槇の大木があるのを思い出した。せいぜい百年しか生きない人間を、千年以上生きる槇の木から見るとどう見えるのか。思い切つて相対化した視点。

うつ病の治ったきみとふたりしてキットカットをサクリと噛んだ
松岡秀明

医師として元患者といっしょの場面をうたつた一首。私にはよく分からないが、「サクリと噛む」なんていうことは、うつ病がひどいときにはできないのだろうか。事実はおくとして、下旬、救われたような感じをうまく表現している。

唸り上げ廻り込む風の激しさよ逃げられぬ島は海の上
に耐ふ
浜田ゆり子

台風に襲われる奄美大島をうたう。気象図をみているような、鳥瞰的な視野の表現が独特である。「廻り込む」は、台風の渦の動きのイメージだろう。